

## 日本英語文化学会第24回全国大会 研究発表概要

### 第1発表

英語の代用表現 *one* の照応関係と解釈について

中井 延美 (明海大学)

英語の *she, it, one* のような代名詞は代用表現(*pro-form*)であり、これまで「言語的先行文脈のどこかに代用表現に対応する先行詞が存在しているはずであり、それを同定する」というモデルが想定されてきた。本発表では、そのようなアプローチには部分的に問題があることを、代用表現 *one* に焦点を当てながら議論する。代用表現 *one* は、基本的にテキスト内に限定された照応表現であり、統語論的には  $N'$  ( $N$  バー)の代用形であると考えられている(cf. Radford 1981, McCawley 1988)。したがって、*one* の解釈にあたっては、先行の名詞句のうち  $N'$  ( $N$  バー)の部分を同定すればよいだけで、語用論的操作の関与はほとんどないという見方が少なくない。一方、*one* の照応は統語的な構造関係だけでは規定できず、先行詞の主要部名詞とそれに隣接する要素との間に成り立つ意味関係によって制約が課されることも指摘されている(cf. 今西・浅野 1990: 231)。たとえば、(a) Bill got a first prize this year, and I got one last year. (Quirk et al. 1985: 863)では、代用表現 *one* と先行詞 *a first prize* の間に、同一対象指示(*coreference*)関係が成立しないが、少なくとも Bill と I が取ったのは同じ種類の賞だと解釈される。しかし、(b) Bill got a first prize this year, and I got a first prize last year. のように後半で代用表現が使われない場合、Bill と I が取った賞が必ずしも同じ種類の賞であるとは限らない、という解釈が許容される度合いが(a)より高くなる。逆に(a)でそのような解釈が許容されづらいのは、*one* 照応の制約が課されているからだと考える。

### 第2発表

ラティガンが描く女性たち—ヘスターの場合

落合 真裕 (十文字学園女子大学)

テレンス・ラティガン(Terence Rattigan, 1911-77)はイギリスの伝統演劇スタイル「風習喜劇」に倣った作品で演劇界に登場し一躍有名になった。その一方で、1940~50年代にかけてはシリアスなドラマでヒット作を生み出した。ラティガン劇で2000年代に上演された作品、または映画化された作品の多くは、それらのシリアスな内容を扱った作品である。中でも、『深く青い海』(The Deep Blue Sea, 1952)は、イギリスの有名俳優たちによって映画化や舞台化がなされメディアでも注目された。

『深く青い海』はラティガン劇の他の作品と同様に、「愛情の不一致」、「孤独」というテーマで人生での敗北を味わう人物の葛藤が描かれている。『深く青い海』では中心人物であるヘスター(Hester)がその敗北を味わう人物である。彼女は夫のもとを去り、階級の異なる男性と駆け落ちしたにもかかわらず、最終的に別れを決意しひとりでの生活を選択する。夫や恋人に妥協する人生を選択するのではなく、彼らと自分との差異をありのままに受け入れ、芸術家としての道を歩んでいく。言い換えれば、ヘスターを通して融合や妥協ではなく個々の「差異」を認め成長していく姿が描かれている。『深く青い海』は孤独や愛情の不一致からくる悲劇というだけではなく、ヘスターを通して「差異」の受容と成長が描かれていることを明らかにする。

### 第3発表

グローバルイゼーションとローカライゼーション

柳浦 恭（千葉経済大学短期大学部）

7月の定例会での高橋強先生によるご発表「日本とアメリカの野球文化の違いについて」からのスピンオフ企画です。

高橋先生のご発表ではアメリカの野球が日本に紹介されると日本的「野球道」として普及したとのご指摘がありました。私はこれを異文化受容における、普遍的パターンの一例であると考えます。すなわち、「異国の文化を採り入れるときには、自国の文化の構造に従いアレンジする」という傾向が顕著であるということです。たとえば、サーカスや大道芸的な色彩の濃いアメリカのプロレスが日本に入ってくると求道的な「ストロングスタイル」となり、日本の観客には熱狂的に受け入れられました。ハワイのアラモアナにあるドン・キホーテは店内が広々としており、レジはベルトコンベヤーを採用しています。つまり日本のドンキがアメリカナイズされているのです。

本発表ではさまざまな文化項目を取り上げ、前述の仮説を検証していきます。

### 第4発表

Ernest Hemingway “*The Old Man and the Sea*” 勝負は実力か運か

錦織 裕之（元立正大学）

長く続く不漁 *salao* のなかで、はるか遠くまで舟を漕ぎ出して巨大カジキと出会う老人 *Santiago* の物語。三日間にわたる闘いの末にようやく仕留めた獲物を、老人は略奪者として現れるサメになすすべもなく奪われてしまう。カジキとの闘いに勝利し、サメとの闘いに敗北した原因は老人の実力なのか、それとも運なのか。

ヘミングウェイ文学の世界によくある、現実社会のなかで戦い敗れ一敗地に塗れる主人公の系譜に連なる物語というよりも、この作品は貧しく孤独な老人が自然を相手にして闘うも、抗いがたい敗北の運命に取り込まれてしまう悲劇のように見えてしまう。しかし悲劇であれば最後に訪れるであろう死が老人に訪れることはなく、むしろ疲れ果てた眠りの中で老人の再生が暗示されているようにも思える。

老人の敗北は悲劇的な運命ではなくて、気まぐれな運なのか。人間はいつも努力と忍耐に値する対価を得ることができるわけではない。どんなに有能な人間であっても、避けることができない運命としての敗北を敢然として受け入れることしかできないこともある。敗北の運命を自明の理として受け入れるとき、私たちは勝者と敗者の違いをどう定義できるのだろうか。そしてそんな人間の精神を救済してくれるものとは何だろうか。

本論では Michael J. Sandel 著 “*JUSICE What’s the Right Thing to Do?*” および “*THE TYRANNY OF MERIT What’s Become of the Common Good?*” で論じられている能力主義 *meritocracy* で得た着想をもとに、“*The Old Man and the Sea*” を新たに読み解いてみようと思う。

## 第5発表

トニ・モリスン『タール・ベイビー』におけるシェイクスピア  
『テンペスト』表象の変遷—ミランダとジェイディーンの関係を中心に—  
福島 昇（元日本大学）

マリン・ヴァルターが「ジェイディーンはミランダの役割を模倣している」と主張するように、『テンペスト』のミランダと『タール・ベイビー』のジェイディーンとの間には幾分共通点がある。美と醜は『テンペスト』のテーマの一つであり、ミランダの他の登場人物についての最初の印象は身体的外観に基づく。ミランダは先住民のキャリバンについては「悪いやつ、私は見るのもいやです」と断じ、嵐で難破したと思った人たちの無事な姿を見ると、「人間がこうも美しいとは！ ああ、すばらしい新世界だわ」と叫ぶ。ミランダの美の対象は、島を支配しているヨーロッパの白人たち、すなわち奴隷制度を肯定する、言わば《すばらしい》「旧世界」の白人たちに対してである。『タール・ベイビー』のテーマの一つも美と醜である。ソルボンヌ大で美術史を学んだ黒人ジェイディーンもミランダのように、ヨーロッパ中心の美の基準に従い人を判断する。彼女は美術史家・モデルとして、美的な価値は客観的に決められるという信念を抱き、美しいと思われるものにはより価値があると信じる。例えば、黒人サンがジェイディーンが滞在する屋敷に不法侵入すると、彼女はミランダがキャリバンを拒絶したのと全く同じように、彼を「醜い」と退ける。しかし、翌日彼がシャワーを浴び、髪を切り衣服を整えると、「美しく魅力的」とジェイディーンは驚く。彼女は前の晩の彼の醜悪さより、この美貌におびえる。

本発表ではミランダの役割を模倣するジェイディーンについて考察する。